

「九州大学総合臨床心理研究」の特別号発刊によせて

針塚, 進
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/1448800>

出版情報：九州大学総合臨床心理研究. 2特別, pp.1-2, 2011-03-15. 九州大学大学院人間環境学府附属
総合臨床心理センター
バージョン：
権利関係：

「九州大学総合臨床心理研究」の特別号発刊によせて

針塚 進 九州大学大学院人間環境学研究院

障害をもつ子どもについての発達支援についての九州大学での取り組みは、教育学部と医学部との連携によって作られた「教育と医学の会」にまで遡ることができます。

「教育と医学の会」が編集する雑誌「教育と医学」は、50年以上の歴史を持ち現在でも継続して発行され、障害児に関して教育学、心理学そして医学の領域を中心とした実践的および学術的研究等の紹介が行われています。このような背景の中で、教育学部には「障害児童学講座」が設置され、さらに昭和61年には教育学部附属「障害児臨床センター」が設置され、翌年には建物も新設されました。この頃より脳性マヒ児に対する発達相談以外に自閉症児の発達相談の来談が増加しはじめ、いろいろな障害をもつ子どもの発達相談活動が活発に行われるようになり、障害をもつ子どもについての臨床実践と研究が一層展開しました。その後「障害児臨床センター」は時限的な施設であったため、多様な子どもの発達相談に対応できるよう「発達臨床心理センター」へと改組されました。これと呼応するかのようになり、自閉症と診断がある子どもから診断はないものの他の子どもと関係がもてない、集団の中で適切な対人関係が持ちにくい子どもについての相談がさらに増加するようになりました。このような状況に対応すべく、他者との関係をもつ場面としてグループをつくり、そのグループでの活動を通して子ども達の相互の対人関係の形成にかかわる支援の臨床実践が始められました。これが、「もくもくグループ」と名づけられ、現在まで続けられている九州大学の臨床実践活動です。

大学の全体的な改組により「発達臨床心理センター」は、大学院人間環境学府附属「総合臨床心理センター」（以下：センター）に改められ、相

談施設として役割はもちろんのこと臨床心理士養成のための大学院専門職学位課程実践臨床心理学専攻及び人間共生システム専攻臨床心理学指導・研究コースの修士課程・博士課程の臨床実習機関としての役割も果たすようになりました。

このようなセンターの状況の中で「もくもくグループ」の位置づけもより大きく変わることとなりました。それは、専門職学課程及び指導研究コースの修士課程の大学院生は全員「もくもくグループ」での臨床実習を行うこととしたことです。すなわち、臨床心理士を養成する大学院で障害をもつ子どもへの心理学的支援に関わる臨床実習を実質的に必修化したことです。それは、高度な専門職としての臨床心理士の重要な資質の一つとして「子どもの発達相談の実践力」は不可欠であるということが、九州大学大学院において臨床心理学を担当する全教員の共通理解だからです。

「もくもくグループ」の実践的な活動構造とプログラムは、主に次のような特徴があります。

- ① 大学院生への臨床経験に合わせて作られている。
- ② 「子どものグループ」活動と「親の会」活動から構成されている。
- ③ 「子どものグループ活動」は、二人のセラピストによるチームアプローチと個別アプローチの両方のシステムからなる。
- ④ グループリーダーによる隔週毎の臨床実践とカンファレンスを通じた集団スーパーヴィジョン体制をもっている。
- ⑤ 「親の会」は、子どもグループと対応してグループ化され、修士2年と1年との組み合わせによる複数の担当者で行われ、「親の会」担当リーダーと教員による毎回の集団スーパーヴィ

ジョンが行われる。

- ⑥ 毎回「子どもグループ活動」担当教員（遠矢）と「親の会」担当教員（針塚）が、それぞれの活動に関わる全体的な指導を行う体制もっている。

以上のように、「総合臨床心理センター」の「もくもくグループ」活動は、「子どもグループ」活動と「親の会」活動が両輪として機能しています。すなわち、「子どもグループ」は、不登校であったり、学級や学校においては友達がなく居場所がないような子どもが、「もくもく」に来ることを楽しみにして、喜んで出かけてくる場であり、そこで自分が認められ自分を表現する経験をもてるような場として位置づけられます。また、「親の会」は、来ることを楽しみにしている子どもを連れてくるだけでなく、モニターを通して子どもの活動を見て、集団の中での具体的な振る舞いを確

認めます。そのため一喜一憂してしまうこともありますが、そのことで保護者同士が相互に励ましあったりしながら子ども理解を深めたり、様々な情報を提供し合える場として位置づけられます。

発達相談活動の重要なことは、子どもへの直接的な発達援助活動と同等以上に親への支援であります。子どもと毎日接し対応する保護者が子どもをどのように理解し受け止め、対応するかが子どもの発達支援そのものです。したがって、相談を受ける私たちは、その発達支援の主役である保護者の補助自我としてどのような役割が取れるかを考えていけるような臨床実践を大学院生とともに行っているところであります。

このような中、総合臨床心理センター紀要「九州大学総合臨床心理研究」の特別号として、「もくもくグループ」の活動を整理し、まとめたものを発刊し、今後のさらなる展開に資することになった次第です。